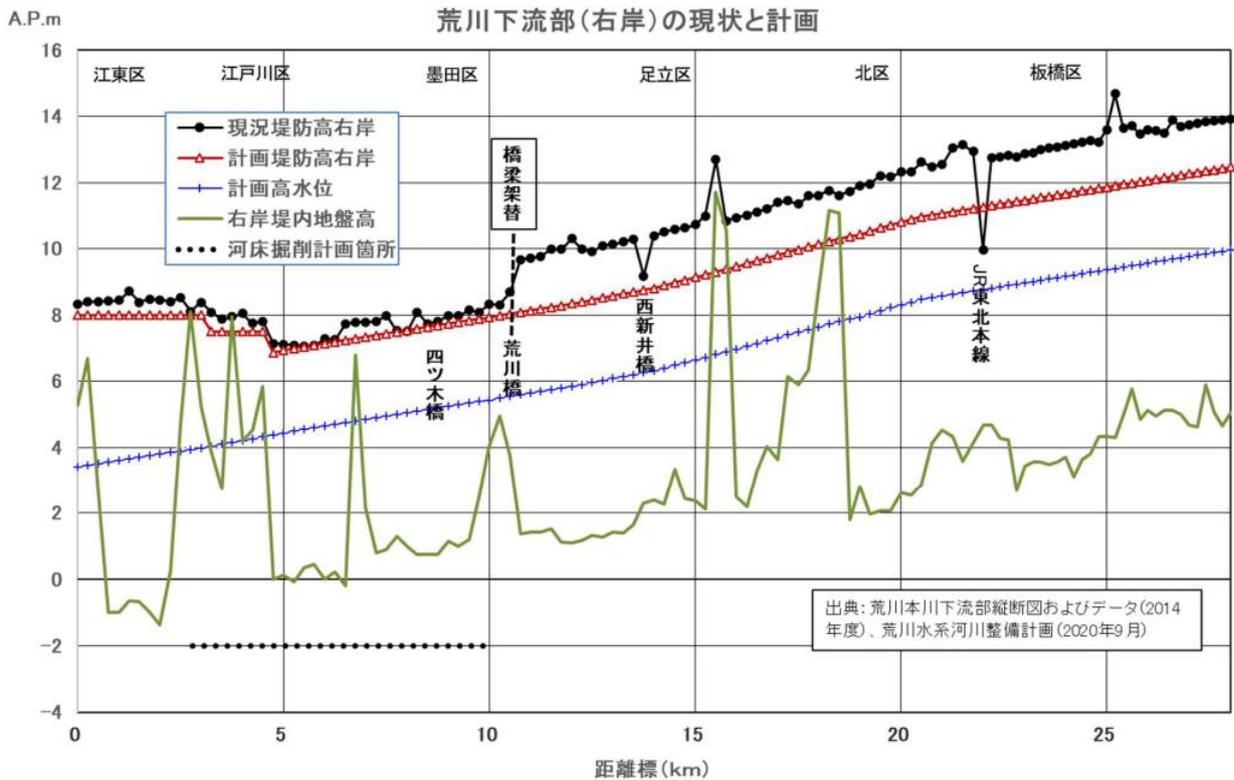
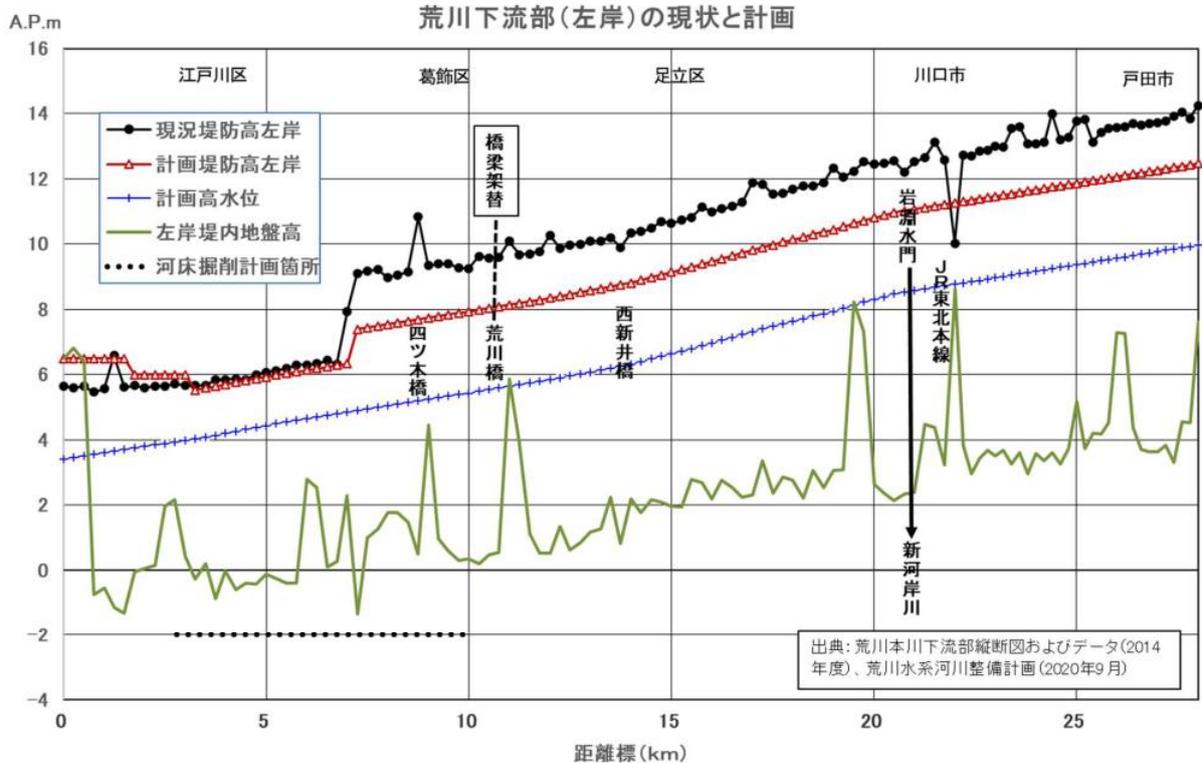


荒川第二・第三調節池の事業が始まるが、荒川には喫緊の治水対策がある

水源開発問題全国連絡会 嶋津暉之

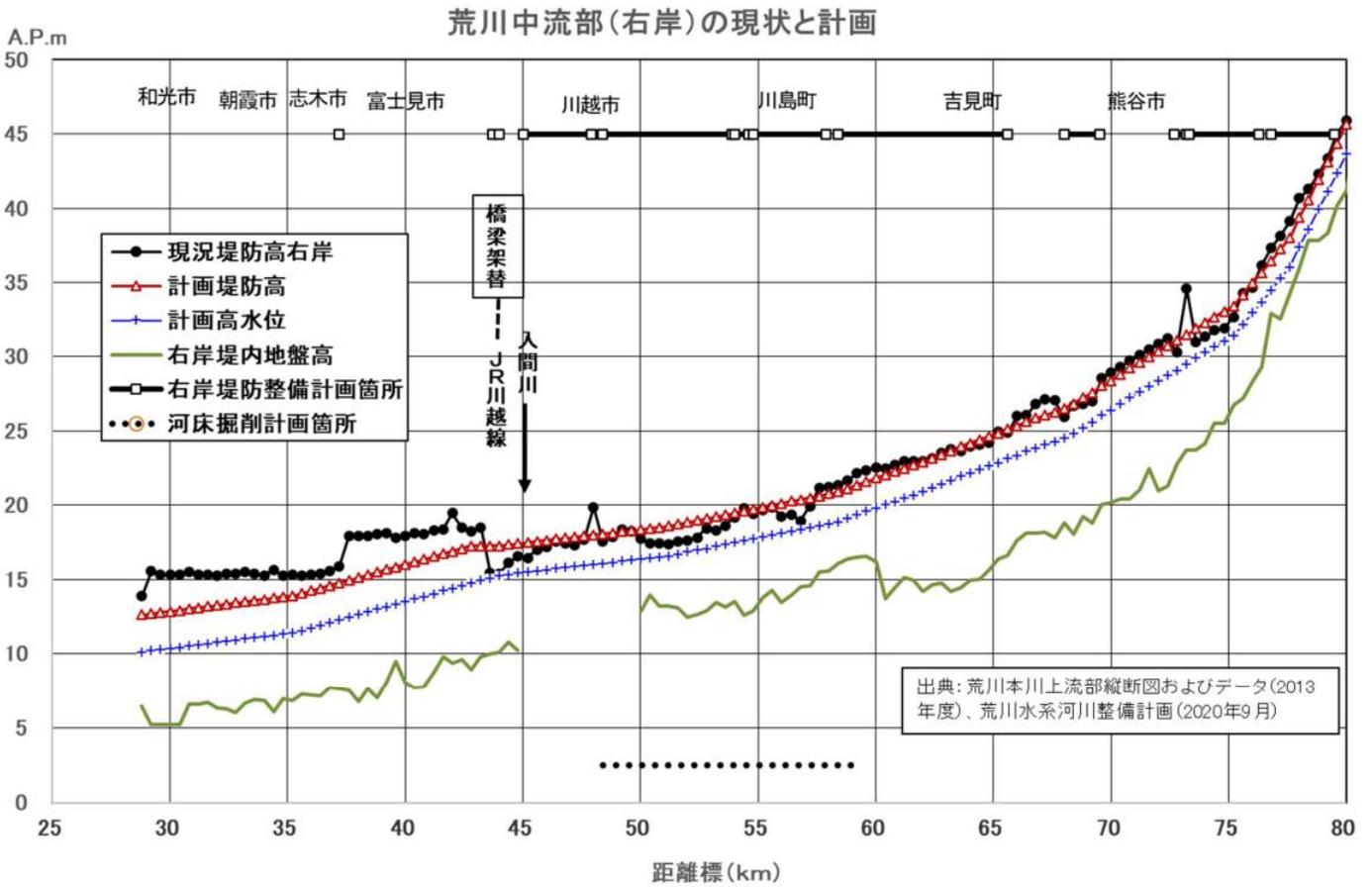
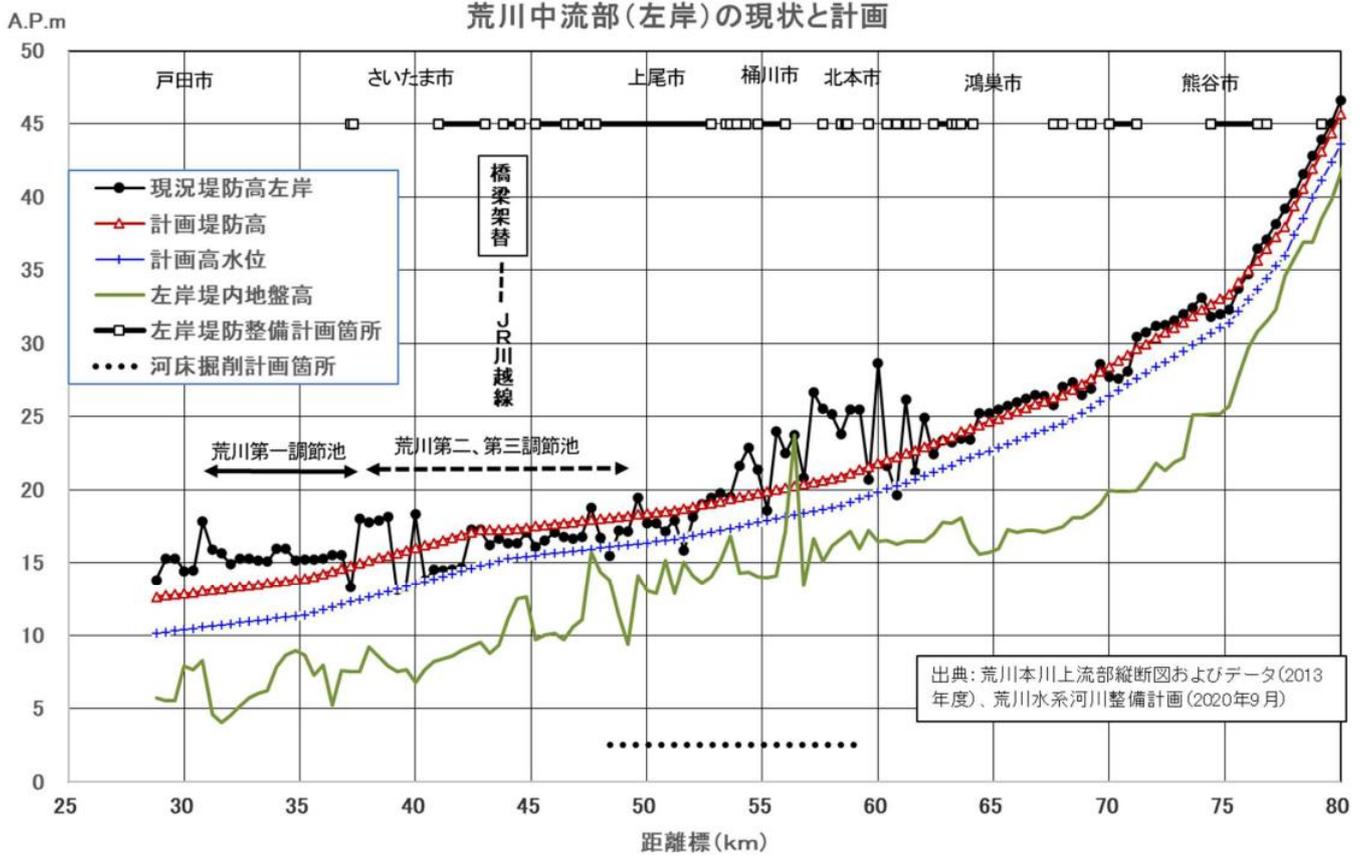
1 荒川の治水計画はどうなっているのか？

(1) 荒川下流部 (0~28 km)



[注] 左岸は約7 kmより上流、右岸は約11 kmより上流の区間で現堤防高が計画堤防高より約2m高くなっているのは、地盤沈下の進行を考慮して築堤されたからである。左岸側の堤防が約7 kmより下流で右岸に比べて1~2m低くなっているのは中川との背割堤になっているからである。

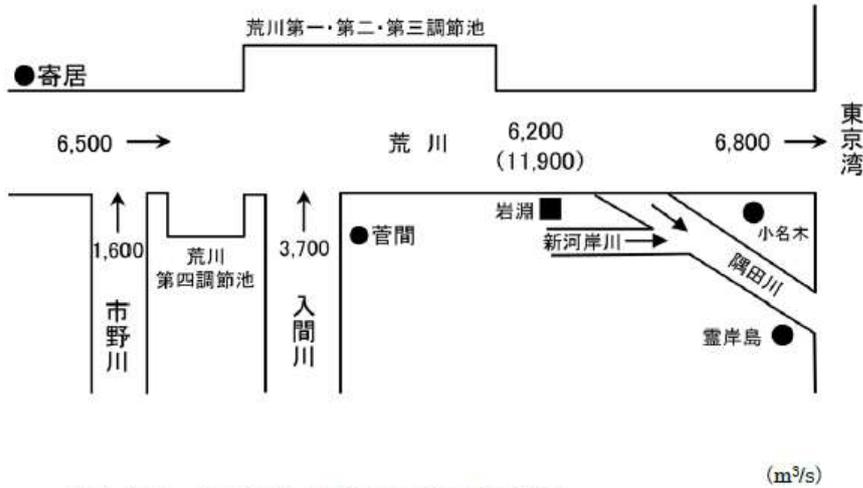
(2) 荒川中流部 (28~80 km)



(3) 荒川水系河川整備計画 (2016年3月策定 2020年9月変更 整備期間は概ね30年間)

荒川・岩淵の目標流量 11,900 m³/秒は、戦後最大洪水である1947年9月洪水(カスリーン台風)と同規模の洪水の発生を想定した値。

2019年10月台風19号で入間川の氾濫があったので、入間川の河道目標流量(菅間)を2020年9月に3,300 m³/秒から3,700 m³/秒へ変更。荒川本川は変更なし。



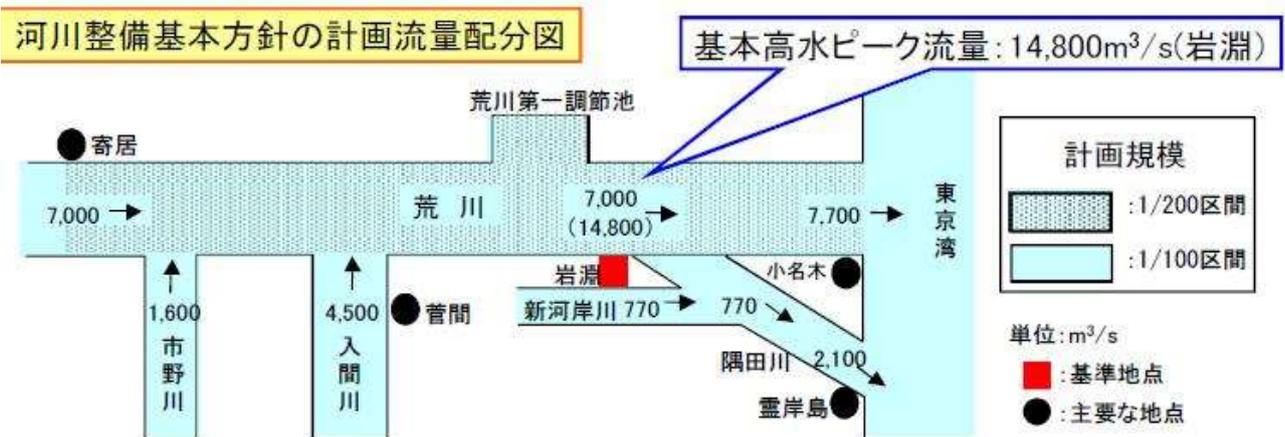
※ () は、ダム等の洪水調節施設がない場合の流量

図 4-1 流量配分図(荒川)

(4) 荒川水系河川整備基本方針 (2007年3月策定) (長期的な目標)

計画規模: 1/200

荒川・岩淵 基本高水流量 14,800 m³/秒 計画高水流量 7,000 m³/秒



(出典: 関東地方整備局「荒川の現状」(2020年1月26日))

(5) 2019年10月台風19号の雨量と流量

(出典: 国交省「気候変動を踏まえた水災害対策検討小委員会」資料1-2 2020年1月17日))

2019年10月台風19号の岩淵の最大流量は11,100 m³/秒で、河川整備計画の目標流量11,900 m³/秒を下回った。ただし、実測流量ではなく、計算流量である。



(6) 荒川の治水対策

① 堤防の整備

荒川下流部（～28 km） 堤防の整備は終わっており、堤防整備の計画はない（図1、図2）。
荒川中流部（28 km～） 37kmより上流の区間は堤防整備が計画されているところが多い。
（図3、図4）

② 河床の掘削

荒川下流部（～28 km） 3～10kmの区間は河床の掘削が計画されている（図1、図2）。
荒川中流部（28 km～） 48～59kmの区間は河床の掘削が計画されている（図3、図4）。

③ スーパー堤防（高規格堤防） → 2

④ 荒川第二、第三、第四調節池 → 3

⑤ 橋梁の嵩上げ（付け替え） → 4

2 スーパー堤防（高規格堤防）事業の虚構

荒川下流部（東京都内のほぼ全区間と埼玉県川口市の区間）で計画されている。

計画 両岸合わせて約 52 km

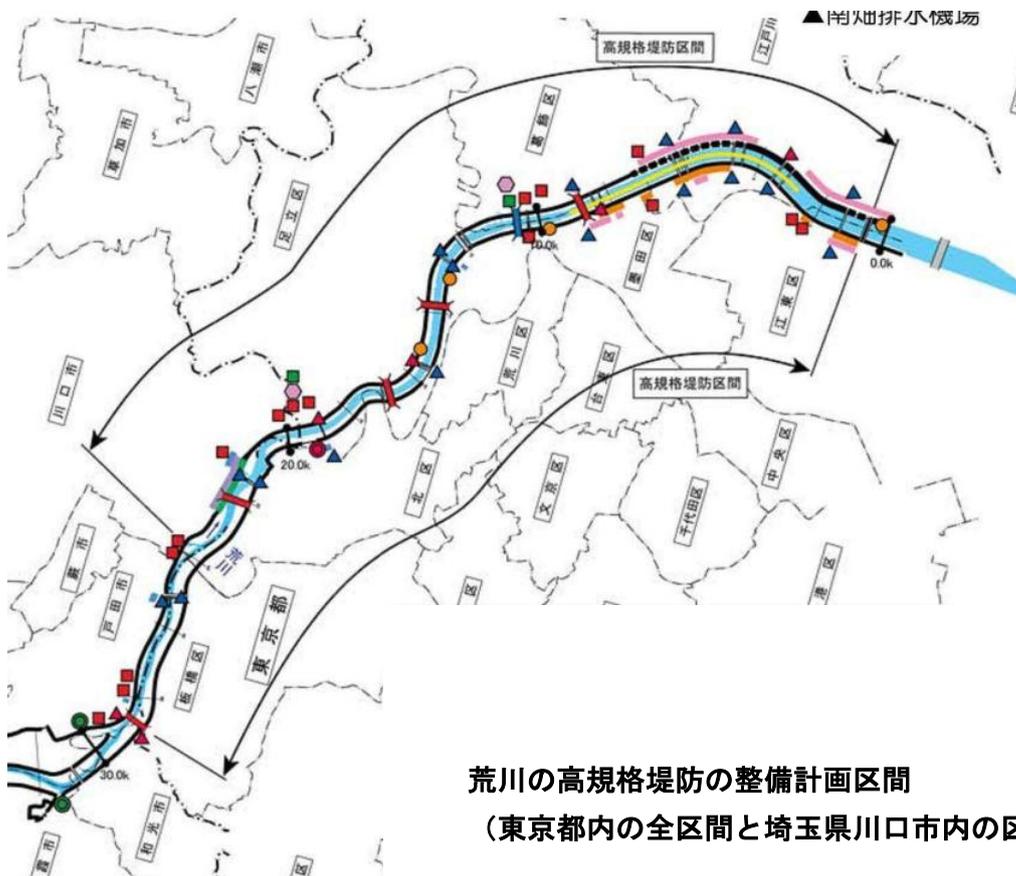
実施済み（2015年度時点）

15地区 整備済み延長 延べ7.51 km

そのうち、高規格堤防本来の1：30の勾配になった延長（30H確保整備延長）は910m

進捗率 $910\text{m} \div 52\text{ km} = 1.8\%$

事業開始後20年経過して、整備率が1.8%とすれば、52 kmの整備を終えるためには、
 $20\text{年} \div 0.018 = \text{約} 1,100\text{年}$ も必要



スーパー堤防の整備が進まない理由

- ① 人々が住んでいる場所に堤防をつくるという手法そのものに無理がある。
 - ・区画整理や再開発などのまちづくり事業が先行しないと、進められない。
 - ・現住居を終の棲家として余生を送るとしてきた人たちを強制的に追い立てる問題を引き起こす。
- ② 巨額の工費が必要。

江戸川の北小岩一丁目の整備単価は1メートルあたり3,900万円
この整備単価を使うと、
荒川の未整備区間約50kmの整備費用は1.95兆円にもなる。

3 荒川第二、第三、第四調節池事業の計画と問題点

荒川水系河川整備計画では、既設の荒川第一調節池の上流側に荒川第二・第三・第四調節池をつくることになっている。荒川第一調節池は洪水調節のほかに水道用水の開発も目的としているが、荒川第二・第三・第四調節池は洪水調節だけを目的としている。

このうち、荒川第二・第三調節池が2018年3月に新規事業として採択され、事業が始まった。現在、環境アセスの手続きが行われている。

(1) 荒川第二・第三調節池の新規事業採択(2018年3月)

- ・事業箇所 さいたま市、川越市、上尾市
- ・事業内容 調節池群の整備 約7.6km² (第二 約4.6km²、第三 約3.0km²)
洪水調節容量 約5,100万m³ (第二 約3,800万m³、第三 約1,300万m³)
囲ぎょう堤 約13km
- ・総事業費 約1,670億円
- ・事業期間 2018～2030年度(13年間)

荒川第二・第三調節池の計画図

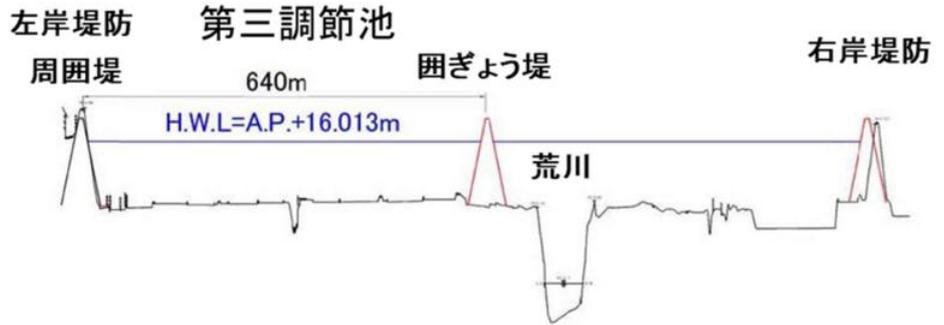


【参考】荒川第一調節池

洪水調節容量 3,900万m³ (彩湖の300万m³を含む)
荒川貯水池(彩湖) (東京都と埼玉県の水道水源)
貯水容量 1,060万m³ (洪水期間中、300万m³を洪水調節に利用)
死水容量 50万m³
建設期間 調節池全体: 1970年度～2003年度(34年間)
貯水池部分: 1980年度～1996年度(17年間)

(2) 洪水調節池の工事

荒川の広大な河川敷（第二と第三は左岸側）に洪水を貯留できるように荒川と河川敷を隔てる高い堤防（囲ぎょう堤）を築き、囲ぎょう堤の最上流側に越流堤（囲ぎょう堤より少し低くしてコンクリートで被覆）、最下流側に排水門を設置する。



【洪水調節池の役目】

かなり大きな洪水が来ると、荒川から越流堤を超えて洪水が調節池内に流入する。洪水が終わったら、下流側の排水門を開けて、調節池内に貯留した洪水を荒川に排出する。これにより、荒川の大きな洪水のピーク流量を低減できている。

(3) 環境アセスメント

洪水調節池は国の環境アセス法や埼玉県環境アセス条例の対象になっていないが、さいたま市の環境アセス条例（環境影響評価制度に関する条例）の対象になっているので、荒川第二・第三調節池の事業は現在、さいたま市の環境アセスの手続きが取られている。さいたま市の環境アセスの手続きは次のとおりである。

- ① 調査計画書 縦覧 → 意見募集 → 修正
- ② 調査計画書に基づき、調査、予測及び評価（環境影響評価）を実施
- ③ 準備書（環境影響評価の結果および講ずべき環境保全措置の内容を記載）
縦覧、市の公聴会、事業者の説明会 → 意見募集、市長が意見提出
- ④ 評価書（準備書を修正したもの） 縦覧・公告

2020年9月末から③の手続きが行われており、環境アセスの手続きは最終段階になっている。

【荒川第二・第三調節池の予定地の自然】

荒川第二・第三調節池の予定地は荒川の広大な河川敷（高水敷）で、その幅は700～1000メートルもある。その大半は、運動場、ゴルフ場、水田、畑等に利用されており、残された自然空間はかなり限られている。残された自然空間としてあるのは、横堤とその周辺、荒川の水面周辺の茂み、点在するヨシ原などである。このような状態の予定地において環境アセスメントの調査として漫然と植物調査や動物調査などを行っても意味がない。残された自然空間を対象として植物の生育状況、動物の生息状況などを丹念に調査する必要がある。また、予定地には水田が少なからずあるが、湛水時の水田には昆虫や野鳥などが結構生息しているので、湛水時の動物調査も必要である。しかし、環境アセスの調査はそのような視点が希薄であったように思われる。

⑤ 荒川第二・第三調節池の事業費と費用負担

荒川第二・第三調節池の事業費は上述のとおり、約1,670億円という超巨額の費用が予定されている。そのうち、7割が国負担で、残り3割を東京都と埼玉県が負担する。

既設の第一調節池の治水分の負担割合は東京都と埼玉県がそれぞれ 68.8%、31.2%であった。

この負担割合を使うと、第二・第三調節池の負担額は東京都が 345 億円、埼玉県が 156 億円になる。

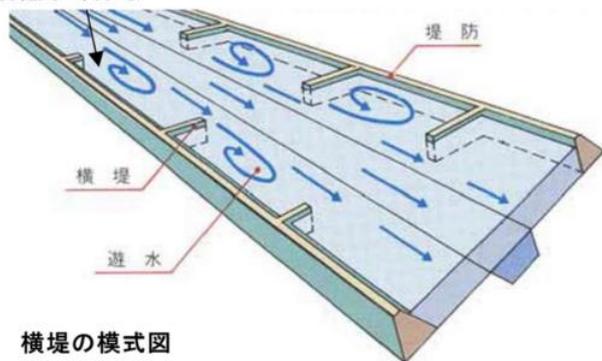
事業費が非常に大きいので、東京都、埼玉県の負担もかなりの高額になる。東京都民、埼玉県民はこの事業が本当に必要なのか、他に優先すべき治水対策がないのかの説明を国や都県に求め、事業の是非をあらためて考える必要があると考えられる。

(4) 荒川第二・第三調節池の横堤

荒川第二・第三調節池には昭和初期（1930年代前半）につくられた横堤がある。通常の堤防は河川の流れと並行しているが、横堤は河川の流れと垂直方向に設置されている。

600m程度の長さの横堤が 700~800m間隔で設置されている。これは荒川から溢れた洪水の流勢を殺ぐ効果があり、実際の洪水で洪水ピークの削減効果が確認されている。

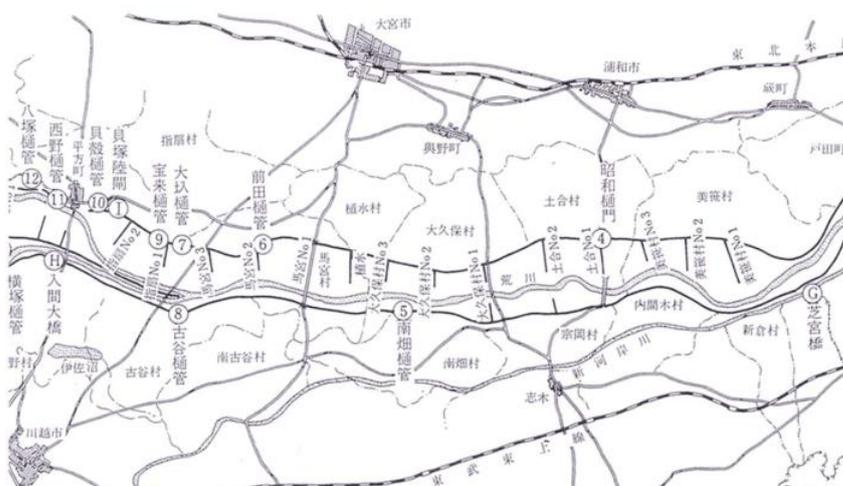
流水が横堤間に留まる



横堤の模式図

(「調節池の役割としくみ」(2005年11月6日) 荒川上流河川事務所)

荒川の横堤 (No.が付いているのが横堤) (「荒川上流改修六十年史」)



(5) 荒川第二・第三調節池は本当に必要なのか？

荒川中流部は広大な河川敷があって、横堤もあるので、現状のままでかなりの洪水調節効果がある。巨額の公費を投じて荒川第二・第三調節池をつくる必要が本当にあるのだろうか。

総事業費 1,670 億円という超巨額の土木工事を起こすことが真の目的ではないだろうか。

荒川水系河川整備計画では第二・第三調節池の建設が終われば、次は 700 億円程度の費用をかけて、第三調節池の上流側で荒川第四調節池（洪水調節容量 3,200 万 m³）の事業が進められることになっている。

4 荒川には喫緊の治水対策がある（荒川下流の橋梁付近の堤防嵩上げ工事）

荒川下流部は次図のとおり、橋梁付近で堤防高が極端に低くなっているところが 4カ所ある。大洪水が来れば、そこから洪水があふれて大氾濫を引き起こす危険性がある。

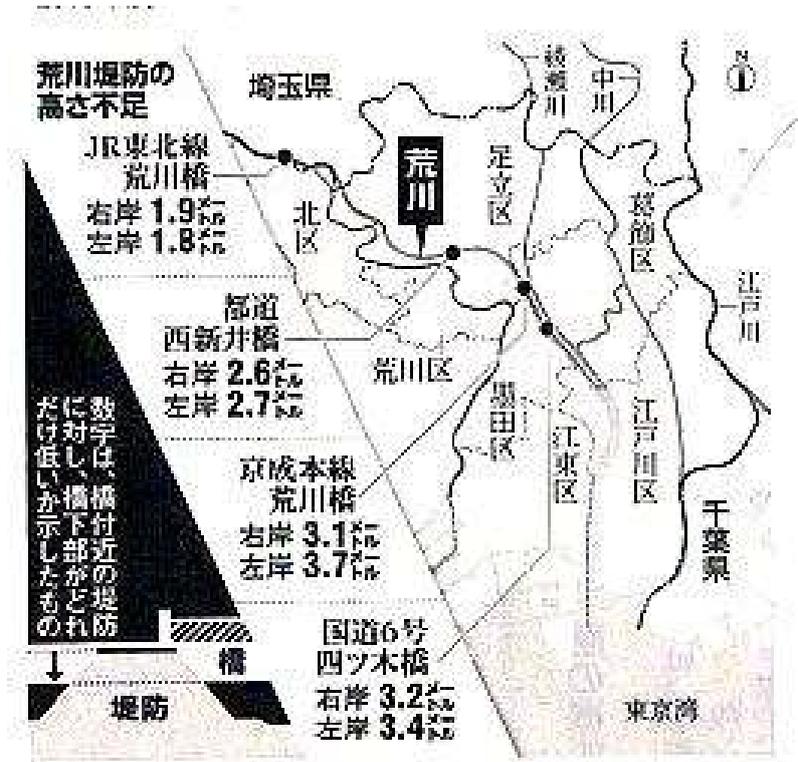
京成本線の荒川橋梁（堀切橋に隣接）は約 400 億円をかけて 2018 年度から架け替え工事に着手し、堤防を嵩上げすることになっているが、現地を見ると、工事はまだ始まっていない。

そして、その他の高さ不足橋梁については嵩上げ工事が全く具体化されていない。

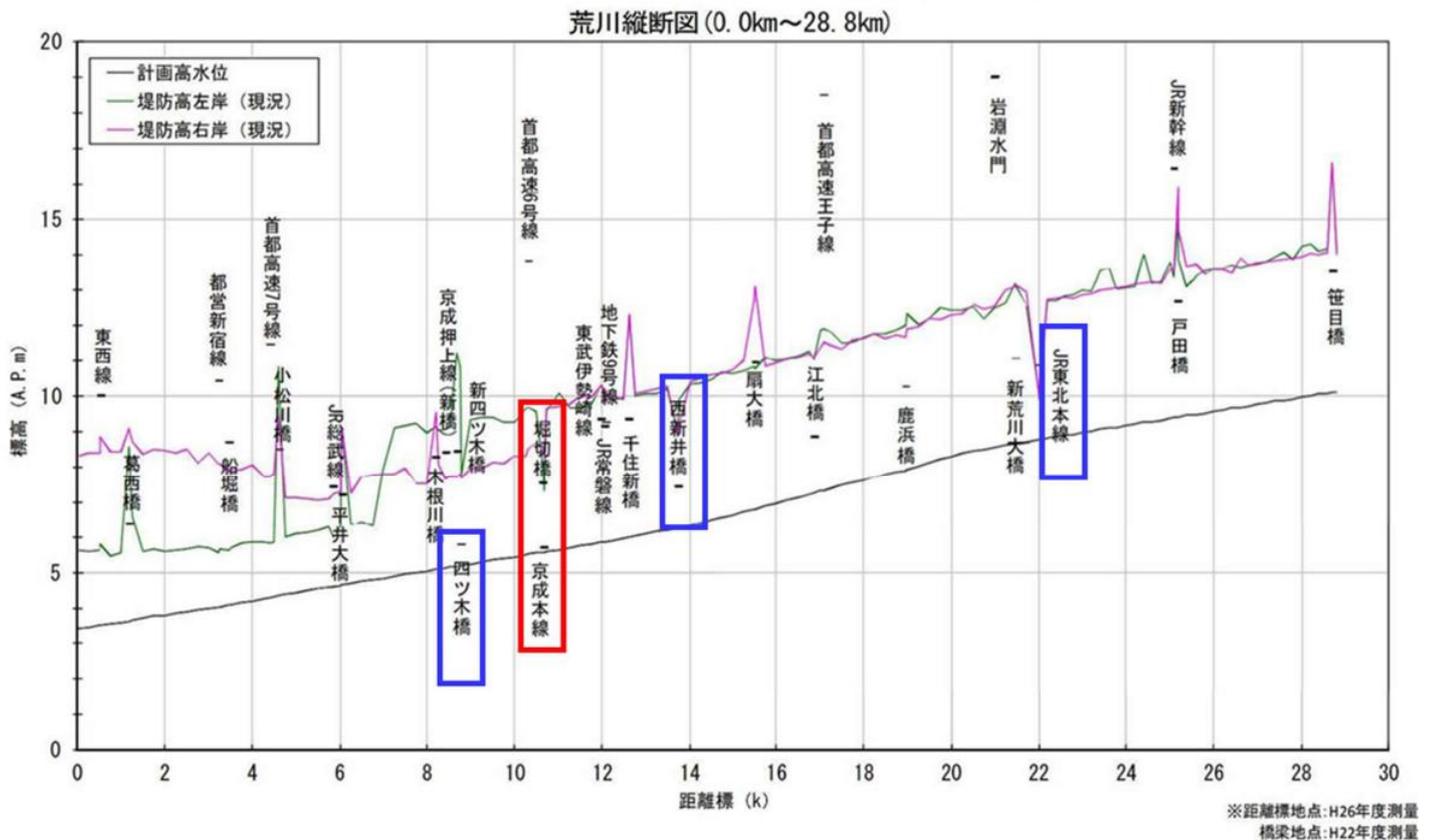
荒川の喫緊の治水対策は、このように堤防高が極端に低くなっている橋梁付近の嵩上げ工事であり、すみやかに進める必要がある。必要性が希薄な荒川第二・第三調節池の建設事業を中止

し、その巨額の河川予算を荒川下流の橋梁付近の堤防嵩上げ工事に投じるべきである。

**荒川の橋梁4カ所高さ不足
周辺より1.8~3.7m低く
(朝日新聞 2015年9月19日)**



荒川下流部の堤防高



橋梁取付部周辺の堤防高不足の状況

(荒川下流河川維持管理計画(荒川下流河川事務所))